
七つの大罪、ネギま!に降り立つ

月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つの大罪、ネギま！に降り立つ

【Nコード】

N6505Q

【作者名】

月詠

【あらすじ】

何の変哲もない極平凡な少年はある時、何も無い白い空間にいた。そこで少年は力を授かり、新たな世界に降り立つ

七つの大罪、真理と会う

真っ白な空間

？「ここは…何処だ？」

確か俺は、学校から帰って飯食って風呂入ってねたはずなんだが

？？「この空間に名前はねえ」

どこから声がした

？「誰だ！！どこにいる！？」

目の前が光り、光り終えたそこには人の形をした 何か とデカイ
門があった

？？「ここは俺の空間だ」

？「あんたは？」

人の形をした何かが喋った

なんで口だけあるんだ？

真理？「俺は一であり、全であり、世界であり、宇宙であり、神であり、真理だ 皇 恭夜」

恭夜（以降、恭）「へー、それで？なぜ俺はここにいる？」

なんで、俺の名前を知っているかはこの際おいといて

真理（以降、真）「俺が呼んだからだ」

何？神に呼ばれるような事したおぼえはないぞ？

恭「なんで？」

真「お前にやってもらいたい事がある」

恭「やってもらいたい事？」

真「ああ、お前は平行世界を知っているか？」

平行世界？

恭「分岐点がどうか、i fの世界とかのか？」

真「そうだ、中にはゲームやマンガの世界やその世界に限りなく近いせかいもある」

恭「俺にその平行世界に行けと？」

真「そうだ、お前がいたいという世界を創ってお前の活躍見てみたい」

なんで？

恭「なぜ俺なんだ？」

俺はいたって凡人だぞ

真「なんとなく、勘だ」

恭「おいおい、そんなんでもいいのかよ」

真「俺も暇なんだよ」

恭「暇つぶしのために俺は…orz」

真「おい」

恭「グッ、いいだろ行つてやる」

真「おつ、いいんだな？元の世界には戻れないぞ？」

恭「かまわない、これといった未練もない」

真「わかった」

恭「でっ？、どこに行くんだ？」

真「ランダムだから、まだ決まってるない」

真「そうか………そういえばテンプレ的な能力はあるのか？」

二次小説とかよくよんでたからなー

真「あたりまえだ、凡人に何活躍を期待しろと言っんだ」

凡人………orz

すっ、好きで凡人やってんじゃねよ!!

恭「えっ、選べるのか？」

真「ああ、何がいい？言っとくが能力は1つだぞ？」

恭「うーん、何にしょ」

次世がどこなのか、どんな場所かわからんからなー

真「早くしろよ？」

どうしょ

恭「うーん……よし！！おい、決まったぞ」

真「うん？おお、やっと決まったか？」

恭「鋼レンの七つの大罪とホムンクルスの体だ」

こいつの姿見て何か引つかかってたんだが、やっと思い出した、こいつ真理まんまじゃねえか

真「なんか二つつぽいけど、まあいいわ

ん？俺の顔に何か付いてるか？」

いや、顔ねえだろ！！

まあ、体は能力じゃないしな

真「よし、さっさとやるぞ」

恭「わかった」

真理が俺に向けて手をかざすと俺の身体が光った

パアーーーー

恭「うつ……………」

光がおさまり真理が手を下ろした

真「うん、完璧だ

そろそろ時間ないからもういかせるぞ？時間の概念なんてないけど」

どっちだよ！！

真「うんじゃ」

パチン

ギーーーーー

真理が指を鳴らすと門が開き中から無数の黒いウネウネした手が出てきた

恭「うわっ!!」

無数の手が俺を門の方え引きずり込む

恭「おい!!なんだこれ」

文句を言おうと真理の方を向いたが

真「がんばー」

だいぶ引きずりこまれ顔と右手しか出てないが、もう飲み込まれそうだ、だから

恭「いつか、ぶん殴ってやる!!」

俺はとうとう飲み込まれ気が遠くなっていく感じがした

七つの大罪、真理と会う（後書き）

どうも、FMYです

どうでしたか？憧れと興味で書いてみました

ここはこうした方が良いか、ああした方が良いかあれば是非お願いします！

主人公設定（前書き）

更新はあまり期待しないで下さい…orz

主人公設定

スメラギ キヨウヤ

名前 皇 恭夜

二つ名『最強』『最速』『百面相』『暴食』『陰使い』『殺戮狂喜』

性格 基本、無関心で気まま。気分でテンションが大幅に変わる事がある

姿形 姿はエンヴィーの身長を180cmぐらいまで高くし、少し大人びた感じ

髪色は黒

目の色はエメラルドグリーン

Fate風ステータス

筋力 A+++ 魔力 -

敏捷 A+++ 幸運 B

耐久 EX 宝具 A

【スキル】

嫉妬のEnvy 見た事のある姿なら自由に変えられる。

強欲の Greed 『最強の盾』 身体の硬度を変えられる。ダイアモンドぐらいまでだったが、真理のせいでナギの千の雷にも耐えられるようになった。

色欲の Lust 『最強の矛』 爪を鋭く尖らせ鉄をも裂くが、真理のせいで鋼はおろかダイアモンドをバターのように切り裂く。

憤怒の Bradley 『最強の目』 すてべを動きを見切れたが、コレも心理せいで光の速さも、化けた幽霊や妖、魔族だろうとすべて見抜く。

怠惰の Sloth 『最速』 残像すら残さず、目で追うことから出来ない速さで移動する。

暴食の Gluttony 異常な嗅覚と食欲をもつ。擬似真理は腹でわなく、手のひらに目が浮き飲み込む

傲慢の Pride 陰をあやつる、陰は半径百キロ以内なら伸び縮みは自由自分、周りの陰を取り込むことも可能なので範囲はほぼ無限大、

【宝具】

醜き欲 A 固有結界のようなもの。NARUTOの月詠のような空間で人間の醜い欲を絶え間なく感じさせる。コレを受けた者は必ず廃人と化す。

備考

ウロボロスは能力を使用するとき、使用する場所に浮かぶ。

魔力は無いが気はラカン並である

七つの大罪、大地に降り立つ

ドスン！！

恭「痛つて……真理のヤロー、今度会ったら絶対殴ってやる……」

そう思いながら周りを見る

前、荒野 左、荒野
右、荒野 後ろ、荒野

恭「何処だココー！！」

叫ばずにはいられなかった

恭「さすがこれはねえだろ！！周り見渡す限り荒野って、どういう事だよ！？」

そこで違和感を感じた

恭「ん？ポケットに何か入ってんな」

ポケットを探ると紙が入っていた

恭「紙？なんか書いてんな」

真「フオツフオツフオツ……ワシの力で強化しておいたから、一応能力の説明をしておくぞ？　まずは【嫉妬】じゃ、切れ味UPでダイアモンドもバターのように切れるぞい、【強欲】じゃが本気を出せばナギの千の雷をいくらでも防げるぞ、次に【憤怒】じゃが光の速さも、幽霊や妖、魔族も見切れるぞ、ホムンクルスの身体だが補給無用、無限供給、完全な不老不死じゃの、つまり人間は要らん。姿はEnvyを背を高くしたような感じじゃ、それじゃ頑張るのじゃぞ？　フオツフオツフオツフオツ

どうだ！？威厳に溢れていただろ！！ハッハッハッハッ……

ついでだが【ネギま!】の世界で原作1000年前だ、修業にはちようどいいだろ』

何も知らない奴が最後の以外見てれば威厳はあっただろうよ

って【ネギま！】だと！！しかも1000年前！？エヴァンジェリンもまだ真相になってねえじゃん、それどころか生まれてすらいねー、修業にしたって長すぎじゃね！？

恭「くそつ、食い物とかどうすりやいいんだ？ホムンクルスだから腹へらねえのか？」

食わないで生きていけるとか不思議な感じだな

恭「それにしても【ネギま！】か、俺も魔法とか使えるのかな？
【闇の魔法】は良さそうだけどリスクが大きそうだしな

やつぱ。ラゴン。ールみたいに気で強化のほうが良いかな？まっそれ追々考えるとしますか」

恭夜はあてもなく歩き出した

七つの大罪、下界に降りる（前書き）

喋り方を一定にするのが以外に難しい………

七つの大罪、下界に降りる

500年後

とある町の近くの森

恭「ふう、久しぶりの外だねえ」

今までずっと山にこもって修行してたからな

恭「500年たったんだ、人間の文化もだいぶ進化しただろう」

さて街でも探すかねえ

街

ガヤガヤ

恭「おつ、結構賑わってんだねえ」

今、フード（キ。グダムハー。の??機関の）を被りながら歩いている

なんでフードを被ってんのかって言うത്事情がある、修行中に正義の魔法使い（笑）のやつらが来て問答無用で攻撃してきたから皆殺しにしておいた

殺して何も思わない俺は異常なんだろうかねえ

その後も何度もしつこく来たが何人か逃したが殺してやった、最近

は来ないけどまあいいだろ

まあ正義馬鹿の奴等が俺を賞金首にしてるかもしれないから、その保険だ

恭「さて、載ってないかねえ」

賞金首の一覧を見ている、賞金首びにされているかの確認もそうだが金はあるても困らないからねえ

恭「うん？……なっ、なんで」

そこに案の定俺が載っていたが

エンヴィー

通称 皆殺しのEnvy

懸賞金 4000万\$

恭「はあ！？なんで！？なんで！？」

エヴァジェリンでも600万\$だぞ！？なんで俺がこんなに高いんだよ！！しかもなんで名前がエンヴィーなんだよ！？1回ブチ切れて『人間がエンヴィー様に勝てるわけねえだろ！！』って言ったけど

恭「はっ！こんなに騒いだらバレるかしんねえ」

最近、襲ってこないと思ったらこういうことかよ！！4000万\$
の賞金首の所なんかわざわざ来るわけないだろ
くそっ！！あれもこれもあの真理のせいだ！！

真『人のせいにすんな！！人じゃないが』

何か聞こえたが知らねえ

ここはさっさと逃げる！！

ピュ~~~~

??「……………あれが」

恭夜が走っていく姿を一人の幼「幼女言うな！！」…………少女と1つ
の人形が見ていた

?「ゴ主人、誰ニッテンダ??」

??「いやっ、バカにされた気がして」

?「オイオイ、モウボケカ?」

??「誰が年寄りだ!!」

七つの大罪、闇の福音と出会う

??「待て」

街からだいぶ離れもう大丈夫と思い歩いていたら誰かに呼び止められた、声の方を向くとそこには1人の少女がいた

恭「あん？誰だ？」

エヴァンジェリン（以降エヴァ）「私か？私は誇り高き悪の魔法使い『Evangeline・A・K・McDowell』だ、お前が『皆殺しのEnvy』だな？」

ここでエヴァ！？？って言うか何でここにエヴァがいるんだ！？しかも俺目当て！？

恭「だったらどうすんだ？おチビちゃん？」

おチビちゃん……しっくりくるねえ

エヴァ「おっ、おチビちゃん！？フツ…フハハハハハ、どうやら死にたいようだな」

恭「はあ？いきなりな」

エヴァ「『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック闇の精霊29柱！
！』」

恭「うおっ！！危ねえなあ……いきなり何しやる」

エヴァ「うるさい！！おまえは私の怒りに触れたんだ！！『リク・
ラク・ラ・ラック・ライラック来たれ氷精、闇の精！！ 闇の吹雪
！！！！』」

ドカアアアーーーーン

エヴァ「フハハハハハ、どうだ思い知ったか！！」

チャチャゼロ（以降ゼロ）「オイオイ、御主人、目的忘レテネーカ
??」

エヴァ「……………だっ、大丈夫だ、私が忘れるはずがないだろう」

ゼロ「ナンドヨ、ソノ間ハ」

エヴァ「うっ、うるさい！！私が大丈夫だと言えば大丈夫なんだ！
」

ゼロ「ナンドヨ、ソレ」

エヴァ「ふっ、ふん！！この程度で終われば所詮その程度と
言うことだ」

エヴァ（とは言ったものかなり本気で撃ったし、見たところ直撃
だしこれは本当にマズイかもしれん）

シュウウー――

煙が晴れた所には右腕が黒く変色した無傷の恭夜がいた

恭「フー、なかなか重い一撃だったな」

エヴァ「なっ、む、無傷だと！？私の一撃が！？」

恭「ああ、結構効いたな」

エヴァ「私の一撃が………… orz」

恭「だから結構効いたって、なっ？」

ナデナデ

エヴァ「ふえっ??」

ふえっ、だってよ可愛いなあおい

ナデナデナデナデ

エヴァ「なっ、やっやめろ／／」

そう言われたから手をどけた

エヴァ「あっ…………」

少し寂しそうだったがいいか

恭「でつ、俺に何のようだ？」

エヴァ「ふつ、ふん。あの伝説の『最強』『最速』『百面相』『暴食』『陰使い』『殺戮狂喜』と、いろんな名を持つ『あの』エンヴィーを見かけたからな」

なに！？いつの間にそんな二つ名が？っていつか厨二くせえなあ、おい

恭「なんだそれ」

ゼロ「才前ノ事ダヨ」

恭「はあ؟؟、そんな大層な名、もらう様な事したおぼえねえぞ」

正義馬鹿、殺したぐらいだしな
後はずっと山に籠ってたしな

エヴァ「そんな訳があるか、おまえが居た山は『入れば絶対に帰れない』と言われるぐらいだからな、よほどの事をしたんだろな」

でもな

恭「まあいいや、そんで??用はコレだけか?ならもう行くぞ??」

エヴァ「まつ待て!!エンヴィー!!私の物になれ!!」

はあ?

恭「やなこつた、誰かの物になる気はないんだよ」

エヴァ「なつ、わつ私の何が不満だ!?!」

恭「いやつ、別に??ただ誰かの物になりたくないだけだ、まあそんなに俺の傍にいたいなら.....俺の物になるか??」

うええ、自分で言ってる気もち悪い

エヴァ「なつなんで私がお前のものに!!.....でっ、でもお前がどうしてもというのなら//」

ゼロ「ケケケ、顔真ッ赤ジャネエカ?？」

エヴァ「うっうるさい!!」

やっやばい、めちゃくちゃ可愛い!!だがここで一緒に行動すれば原作がかなり変わるかもしんねえし!!

真『ヘタレ』

うっさい!!こんな時に出てくんない!!くっここは戦略的撤退(逃げる)だ!!

恭「ほっ他のところに用があんだ、じゃなあ——」

ピュ——

エヴァ「おっおい!!エンヴィー!!待て——!!」

七つの大罪、造物主の使徒に会う

あれから、いろいろあった

魔法世界に行き旅をした、魔法使い共が久しぶりに来たがもちろん
返り討ちにした、エヴァも来たが逃げ切った

今はある森にいる

??「君が『百面相』かい??」

恭「誰だ??お前」

フェイト（以降フェ）「僕かい??僕はフェイト・アーウェルンク
スさ」

恭「で??何のようだ??」

フェ「いや、ただ君に興味を持ってね」

恭「興味だけでここまで来たのか??暇人だな」

フェ「そうでもないよ、不老不死なのに見たところ吸血鬼でもない、人間に限りなく近い、これだけでも十分だよ」

っ、こいつ…………

恭「それで??それだけじゃないんだろ??」

フェ「ああ、『最強』とまで言われる君がどこまで強いのか確かめたくてね」

恭「へえ、やろつての??」

フェ「ふつ、『石の槍』」

恭「おつと、やる気満々つか??だったら……………やってやろーじやねえかー!!」

バコオン

ボロボロ…………

『最強の矛』で指をへの字に鋭くし『石の槍』を砕く

フェ「これならどうだい?? 『冥府の石柱』」

恭「無駄、無駄、無駄あー——」

『最強の盾』も合わせて石柱を砕いていく

フェ「素手で碎くなんて、ありえないね」

『最強の盾は』千の雷も効かないからな

恭「『在り得ないなんて在り得ない』」

フェ「!?.....フツ、良い事言うね」

恭「どっかの強欲が言ってたぜ!! 俺も強欲だがなあ——!!」

ビュン!! ボカン!! ザクツ!! ボコ!!

魔法を撃って、それを碎き落とし、たまに『最強の矛』で斬ったり

『最強の盾』で殴る

ドカツ!! ボコツ!! ボキツ!!

とうとう殴りあいになり

フエ「はあはあはあ………そっそろそろ………はあはあ、決着をつけようか」

恭「あっああ………ハアハア、いいぜえ?？」

決着が付こうとしていた

フエ「はああ………!!」

恭「おらああ………!!」

ズドン!!!

恭「ハアハア、俺のかっ、勝ちだぜ?？」

恭夜が勝ったようだ

フェ「さすが『最強』と呼ばれるだけはあるね」

恭「……………恭夜、皇 恭夜だ」

フェ「……………偽名だったのかい??」

恭「それも本名だがこっちの方が馴染みがある」

フェ「わかったよ、用も済んだし僕はコレで」

恭「ああ、またな」

フェ「今度はゆっくりお茶でもしながら話そう」

恭「ハハッ!! ああ、また今度な」

フェ「フッ」

フェイトは少し笑い転移で消えた

恭「さて、俺も行くか」

すでに怪我などない無傷の恭夜がそう言っ
て森を出た

七つの大罪、造物主の使徒に会う（後書き）

月詠です

できれば感想欲しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6505q/>

七つの大罪、ネギま!に降り立つ

2011年10月8日08時55分発行